

高山祭の屋台

高山祭の屋台の個性は、競争から生まれたものである。高山の屋台組はそれぞれ独自に屋台を製作し、伝統的に屋台組の間でデザインや装飾を競い合っていた。

屋台のデザインは江戸の山車を参考にしていると思われるが、装飾は京都の流行の影響を受けており、特に金属製の飾りは京都の職人が製作した。江戸と京都の美意識が融合した屋台のデザインは、商人の町としての高山の伝統を象徴していると言えるでしょう。

それぞれの屋台は、それぞれの地域で「屋台蔵」と呼ばれる背の高い倉庫に保管される。天候や取扱の不備で屋台が破損しないように細心の注意が払われる。万が一、小雨でも降ったら、屋台蔵で保管され、祭りの間、その場で待機する。2010年代までは、それぞれの屋台を動かすのも乗るのも屋台組の人に限られていた。

当初、春の祭りでは16台、秋の祭りでは15台の屋台があったが、火災やその他の事由で数台が失われた。現在はそれぞれ12台、11台となっている。1960年には23基の屋台すべてが重要有形民俗文化財に指定され、2016年には「日本の山・鉾・屋台行事」の一部としてユネスコ無形文化世界遺産に登録された。桜山八幡宮には秋祭りの屋台4台が展示されている。